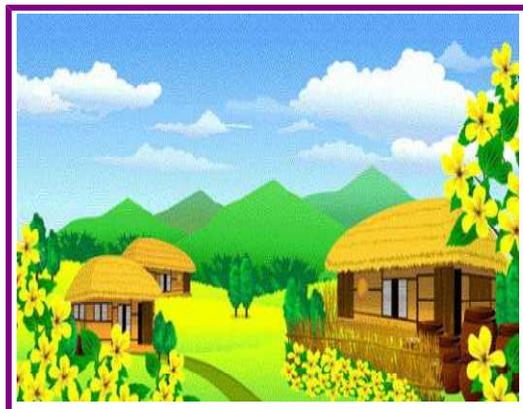


# めぐみイエス・キリスト教会

2019年9月15日(日)第三主日礼拝  
週報「通算第473号」



2019年標題聖句

第Ⅱペテロ1章10節

《ですから、兄弟たちよ。ますます熱心に、あなたがたの召されたことと選ばれたこととを確かなものとしなさい。これらのことを行なっていれば、つまりくことなど決してありません。》

第一礼拝	毎週日曜日	午前10時～11時
第二礼拝	毎週日曜日	午後6時～7時
聖書の学びと祈り会	毎週水曜日	午後6時15分～7時15分

牧師 鈴木 竜 実  
ますみ

※当教会は、モルモン教、エホバの証人(ものみの塔)、統一教会(原理福音)とは、一切関わりがありません。

◇◆◇2019年9月15日 第三主日礼拝(午後6時)

司会 鈴木 竜実牧師 奏楽 佐野 みゆきさん

◎礼拝プログラム

【前奏祈祷】

【賛美Ⅰ】 新聖歌341 「恐れなく近寄れ」 p. 542

【交読文】 No.42 詩篇第130篇 p. 912

【賛美Ⅱ】 新聖歌467 「世の終わりのラッパ」 p. 752

【使徒信条】

【主の祈り】

【先週説教】

【賛美Ⅲ】 オリジナルNo.16 「神の都へ」

【聖書朗読】 ヨハネの福音書19章17節～22節(新約p. 202上段)

【祈 禱】

【説 教】 《罪状書きとは?》 鈴木 竜実 牧師

【聖 餐 式】

【賛美Ⅳ】 新聖歌165「栄光イエスにあれ」 p. 235

【平和祈り】

【頌 栄】 新聖歌63 「父・御子・御霊の」 p. 85

【祝祷後奏】

※本日の聖書箇所(ヨハネの福音書19章17節～22節)

19:17 彼らはイエスを受け取った。そして、イエスはご自分で十字架を負って、「どくろの地」という場所(ヘブル語でゴルゴタと言われる)に出て行かれた。

19:18 彼らはそこでイエスを十字架につけた。イエスと一緒に、ほかのふたりの者をそれぞれ両側に、イエスを真中にしてであった。

19:19 ピラトは罪状書きも書いて、十字架の上に掲げた。それには「ユダヤ人の王ナザレ人イエス。」と書いてあった。

19:20 それで、大ぜいのユダヤ人がこの罪状書きを読んだ。イエスが十字架につけられた場所は都に近かったからである。またそれはヘブル

語、ラテン語、ギリシヤ語で書いてあった。

19:21 そこで、ユダヤ人の祭司長たちがピラトに、「ユダヤ人の王、と書かないで、彼はユダヤ人の王と自称した、と書いて下さい。」と言った。

19:22 ピラトは答えた。「私の書いたことは私が書いたのです。」

### ●ポイント1. 「どくろの地」とは？

※マタイの福音書27章31節～40節「シモンと道行く人々」(新約p.55上段)

### ●ポイント2. 「罪状書き」とは？

※ルカの福音書23章1節～3節「ピラトの最初の質問」 (新約p.151下段)

そこで、彼らは全員が立ち上がり、イエスをピラトのもとに連れて行った。そしてイエスについて訴え始めた。彼らは言った。「この人はわが国民を惑わし、カイザルに税金を納めることを禁じ、自分は王キリストだと言っていることがわかりました。」するとピラトはイエスに、「あなたは、ユダヤ人の王ですか。」と尋ねた。イエスは答えて、「そのとおりです。」と言われた。

### ●ポイント3. 「ヘブル語」「ラテン語」「ギリシヤ語」とは？

■**ヘブル語**は、ヘブル人が用いた言語で、「ユダの言葉」「カナン語」と言われている。一世紀には、主に宗教関係者の中において話された。旧約聖書は、ヘブル語でほとんど書かれ、一部はアラム語で書かれている。アラム語はヘブル語よりもずっと古く、バビロン捕囚後には、アラム語が公用語となっていた。主イエス様や十二弟子たちも、日常はアラム語を用いていた。

■**ギリシヤ語**は、インド・ヨーロッパ語族に属し、24のアルファベット文字を持つ近代ヨーロッパ語と同系の言葉である。アレクサンドロス大王の遠征により地中海全体に普及し、コイナー(共通)ギリシヤ語として、国際的に用いられるようになった。新約聖書はすべて、このギリシヤ語で書かれている。

■**ラテン語**は、ギリシヤ語と同じく、ヨーロッパ語族のイタリック語派から発達したローマの言語である。ローマが世界を征服するにつれて、ギリシヤ語と共に世界の公用語となった。当時パレスチナでは、ラテン語、ギリシヤ語、ヘブル語の3言語が公用語であった。現在はカトリック教会公用語として使用。

## ◎先週のメッセージの概要【カイザルのほかには】

《ポンテオ・ピラトは、3度イエス様が無実であることを証言し、何とかイエス様を釈放しようと努力していました。そのことを察したユダヤ人指導者たちは、「もしこの人を釈放するならば、あなたはカイザルの味方ではありません。自分を王だとする者はすべて、カイザルにそむくのです。」と、激しく叫びました。

大祭司カヤパを始めユダヤ人指導者たちは、高圧的にピラトと対峙していました。もし釈放するならば、ローマにいるカイザルに直訴すると言う決意を見せていたのです。妻からの忠告にも耳を傾けず、自分の政治生命の危機を感じたピラトは、ついに観念しイエス様を引き出して、裁判席に着きました。「さあ、あなたがたの王です。」

かつてのイスラエルには王政は存在していませんでした。「さばきつかさ」が納めていたからです。最後の士師サムエルの時代に、ユダヤの民の長老たちはサムエルに願い出たのです。「私たちにさばく王を立てて下さい。」と。

このことは、サムエルの気分を害しましたが、神様に祈りますと、何とお許しが出たのです。その後、最初の王「サウル王」が誕生することになります。

ピラトは、軽蔑の意を込めて言いました。「さあ、あなたがたの王です。」

しかし、この言葉は、聖霊が彼の口を用いて言わせたことです。そこに、「王の王、主の主」なるお方が、「ユダヤ人の王」が、立っておられたのです。「除け。十字架につけろ。」「あなたがたの王を私が十字架につけるのか。」「カイザルの他には、私たちに王はない。」こう叫んだのは祭司長たちです。

この言葉の持つ意味はとても重大です。この時、神様の守りが、イスラエルから、聖都エルサレムから取り去られたことを意味しています。そして王であるイエス様を拒否した時に、彼らは、自分たちの王だけではなく、自分の国をも失ったことになるからです。紀元70年、将軍ティトス(後のカイザル)によって、聖都エルサレムは陥落し、ユダヤ人は世界の国々に散り散りとなります。

しかし、ピラトが「あなたがたの王です」と言ったお方が、やがて本当に王となる時が、来ようとしています。このお方こそ、すべての人の主であり、真に「王の王」なるお方です。私たちは、このお方を信じ、従って行くのです。》

## ◎お知らせ

※次回礼拝は9月22日です。平常通り午前礼拝(10時)・午後礼拝(18時)を行ないます。また次回「聖書の学びと祈り会」は、9月18日(水)に行ないます。